◇　漆を纏う　◇
dress up with the URUSHI

a2200906　大竹由布子

▽研究の背景と目的

最近、漆製品は器だけでなく文房具や装身具など幅広い展開をしている。今回その中で私は装身具に着目した。お土産屋さんなどでも、よく漆の装身具を販売しているのを見かける。しかしそれらを見てみると、帯止めやかんざしなど和服向けに作られた商品が多く、形や柄などにも偏りがある。はたしてそれらの装身具は私たちが普段着ている服などと、うまくコーディネートできるのだろうかと疑問に感じた。また、本来装身具は装身的ではなく呪術的なものであったという。外的から身を守る目的で、魔力があるとされるものを常時身に付けたのが始まりだそうだが、現代の漆の装身具にはこのような深い意味があるのだろうか。装身具というものは現代の人々がファッションの一部として手に取りやすいもののひとつであるし、実際に漆を纏うことで、漆の魅力を肌で実感できるのではないかと私は考えた。以上の点から、漆と装身具の本質をしっかりと見つめた上で、日常生活から使用できる装身具を提案する。

▽デザインコンセプト

装身具や漆が昔、呪術的なものであるということを知り、そこから私が思い浮かべたのが、「魔法使い」「魔女」というキーワードだった。指輪は、魔女が作る毒りんごをモチーフにした。指輪ケースは鍋の形をしており、指輪をしまうと毒りんごを煮ている様子になる。ブローチはおとぎ話にもよく出てくる魔法の鏡をイメージした。ループタイは、魔法使いが描く魔法陣を表現した。

▽感想と考察

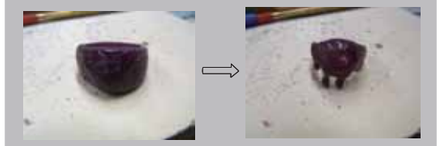
　今回指輪はシルバー、ブローチは木材、ループタイはプラスチックと漆粘土から原型を制作していった。漆はどんなものにも塗ることができるという性質を持っているが、本当のことだったのだと改めて感じた。

　ブローチは強度が心配だったが、実験を重ねて良い方法を見つけ出し、最終的には繊細だが丈夫なブローチを制作できた。また指輪の元となるシルバーは、原型から鋳造、磨きの作業まですべて自ら体験したことが良い経験になった。漆の焼付けの作業は木材に塗るのとでは工程はもちろん、塗りの厚さなどが違うので加減が難しかった。

　装身具を制作しようと決めた時は、「かわいいものを作ろう」という簡単な気持ちで、コンセプトは何も決まっていなかった。しかし、調査の段階でどのアクセサリーブランドもコンセプトをきちんと持っていることを知り、私もコンセプトをしっかりと立てねばと感じた。漆で制作した装身具を身に着けて魔法にかかったように、楽しい気持ちになったり、自分に自身が持てたら･･･という想いをこめて、私はテーマを魔法使いに決めた。コンセプトを決めたことで作品制作のときも想いを込めながら作業することができた。２年間クラフトゼミに所属して様々な種類の作品を制作してきたが、作品にコンセプトを持たせることは少なかったと思う。今回この卒業研究ではしっかりとしたコンセプトを決め、自分の考えなどを追求して作品制作できたことは良い経験になったと思う。今後のものづくりに際しても自分の考えをしっかりと持つことを続けていきたい。

▽制作方法　　～指輪～

１・ワックスで原型を作る。

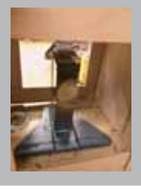


２・鋳造のための土台を粘土、鉄パイプで作り、ワックスを土台の中に入れる。

３・空気が入らないように土台の中に石膏を流し込む。

４．３日間石膏を乾燥させ、ガスコンロと電気炉を使い、中のワックスを溶かし蒸発させる。

５・ガスバーナーで溶かしたシルバーを流し入れる。



６・鋳造して出来上がった指輪を取り出して、形を整えて磨く。

７・漆を薄く塗り、180℃に設定した電気釜に２時間ほど入れて焼き付けを行う。

～ブローチ枠～

１・枠の部分は厚さ３㎜の木板を２枚、繊維方向を逆にして接着させる。その後、形を切り、整える。

２・固めの後に生漆で和紙を巻く。

３・スグロメ漆を何度も塗り重ね、なめらかな表面を出していく。

⇩

～ブローチ中央部分～

１・中央部分は木材で形を切り出した後に、固めを行う。

２･円形の方は、布着せ、下地、錆び、塗りをする。カットの方は貝殺をカットの形にそって切り貼りしていく。

３・最終的にどちらも磨きをして、枠と合わせて微調整する。

～ループタイ～

１･プラスチック素材のボタンの内側に、漆粘土を埋め込む。

２・布着せ
３・下地
４・錆（平らになるまで）
５・加飾